

## [ 編集後記 ]

第85巻3号もお蔭様で盛りだくさんの内容になりました。

巽 浩一郎教授の「呼吸器病学 21世紀の課題」は呼吸器病学の来し方行く末について、わかりやすくユーモアをまじえた巧妙な語り口で述べられ、私も一気に読ませていただきました。私が内科研修医の頃に呼吸器内科をローテートした折、当時は原発性肺高血圧症（PPH）と呼ばれていた特発性肺動脈性肺高血圧症の方が全国から千葉に紹介されていたことを記憶していますが、教室として時代を先取りされていたことを改めて理解できました。そして巽先生の文章の最後は新たに教室を担当される先生の力強い抱負で締めくくられています。

英文原著の1つ目はHanaoka Hideki先生によるもので、骨髄移植後の慢性GVHDの病態にNK T細胞が関与している可能性を示した論文です。2つ目は生活習慣病の外来診療において、自分の病態についての患者の認識度と病態の改善度に関連性があることを示したNeff Yukiko先生のユニークな研究です。

整形外科の鈴木都先生らは対麻痺が癌の初発症状となった転移性胸髄内腫瘍の興味深い一例を報告されました。

研究紹介は3つの部署からご寄稿いただきました。皮膚科学教室では現在、研究テーマの一つとして、膠原病類縁疾患の新しい疾患概念である自己炎症性疾患、特にクライオピリン関連周期熱症候群の病態解析を通して、抗ヒスタミン薬抵抗性蕁麻疹の治療法を追求されています。一方、生殖機能病態学教室からは同教室の長年の伝統である絨毛性疾患や悪性腫瘍から周産期領域、生殖不妊領域に至るまで、教室の研究テーマが紹介されました。一方、本学出身の超ベストセラー作家海堂尊氏著「チームバチスタの栄光」で一躍有名になったAi（エーアイ）ですが、全国に先駆けて設置された千葉大学病院Aiセンターの推進役である山本正二先生が同センターの現状と課題を述

べられています。

さて、千葉大学では平成13年度からベストティーチャー賞が設定されています。平成20年度は「医学部5年生によるベッドサイド（病棟）実習の評価」において最も高い評価を得た小児科がその対象となり、同教室の学生教育担当の菱木はるか先生が受賞されましたので、受賞にあたっての一文を寄せていただきました。

医学研究院では平成20年度から中山俊憲教授をリーダーとして「免疫システム統御治療学の国際教育研究拠点」というプログラム名でグローバルCOEプログラムがスタートしています。本号の話題欄では免疫システムの統御による難治免疫関連疾患の治療法の開発およびその研究を通して若手研究者の育成を目指す同拠点の概要が紹介されています。

本号には腫瘍内科学（消化器内科学）の神田達郎先生のセントルイスからの海外だよりが寄せられました。「どれだけアメリカで通用するのが試してみたい」という気持ちが氏に留学を決意させたと記されています。

最後に本号には平成20年12月に開催された整形外科例会の抄録集が掲載されています。52演題という多数の演題が発表され、整形外科科学教室の隆盛ぶりが覗えます。

連絡道路の今年の桜は例年に増して美しいと感じられた方も多いと思います。本年4月の附属病院ニュースで齋藤康学長のご指導のもと脳神経外科の村井尚之先生らのご努力により、亥鼻山のソメイヨシノの天狗巣病対策と植え替えが進行していることを知りました。時代の流れとともにキャンパスが手狭になることはある程度避けられないことですが、連絡道路の桜と凡秋谷の自然は亥鼻キャンパスにとってかけがえのない財産であり、大切に守りたいと切に感じております。諸先生方のご支援をよろしくお願い申し上げます。

(編集委員 野村文夫)